

上市町埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ

1989年度

上市町教育委員会

1990年3月

正 誤 表

ページ・行	誤	正
6ページ1行目	イーエス・エスキュー	ピーエス・エスキュー
12ページ12行目	吉岡安暢	吉岡康暢
12ページ12行目	世界陶磁全長3	世界陶磁全集3
図版三上段	写-3	削除
" 三 "	写-6	"
" 四 "	写-7	"
" 五 "	写-8	"

序

靈峰劍の麓に広がる上市町は、古くから人々の生活の場として、数多くの文化遺産を育みそだててきた所です。今から約2万5千年前の眼目新丸山遺跡、縄文時代の極楽寺遺跡、弥生時代の江上遺跡などがその歴史を如実に物語っています。祖先が苦難に耐えて、人生を開拓し、懸命に生きてきた中に、激変する今日にも通用し、来たるべき21世紀にも価値を持つに違いない業績と「生き方の哲学」を学ぶことができるのです。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中でこれらの貴重な文化遺産が失われようとしています。

町ではこの事態を重視し、次代を背負う人々にもこのすばらしい恩恵が受けられるよう文化遺産を継承することが、今に生きるもの責務であるとの考え方から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。本書がより多くの方に利用され文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施、報告書の作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室をはじめとする関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

上市町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、上市町教育委員会が国庫補助事業として実施した遺跡詳細分布調査の2年次目（1989年度）の報告書である。
- 2 調査は、富山県埋蔵文化財センター、富山大学考古学研究室の指導と協力を得て上市町教育委員会が実施した。
- 3 調査事務・現地調査は、生涯学習課主事高慶孝が担当し、生涯学習課長藤木勲が統括した。
- 4 遺物の整理、本書の編集・執筆は、調査担当者が行った。
- 5 調査参加者は次のとおり
(現地調査補助員) 金木和香子・越前慶祐・柿田祐司・瀬戸智子・野村祐一・高橋浩二・向山静子・葛山拓也・榎木和代・谷杉延子、以上富山大学人文学部考古学教室学生
(遺物整理) 田中栄子・長倉きよみ・三輪スミ
- 6 本書の作成にあたっては、富山県埋蔵文化財センター橋本正・狩野陸・山本正敏、富山県教育委員会文化課松島吉信、富山市教育委員会社会教育課藤田富七太の各氏と富山大学人文学部教授秋山進午・同助教授宇野隆夫の両氏をはじめとする方々から多大の御協力と貴重な御教示を受けた。深く感謝して御礼申し上げる次第である。

目 次

第1章 はじめに

1 調査の目的.....	1
2 調査の経過.....	1
3 上市町の地勢と自然	2

第2章 分布調査の成果

1 遺跡と採集遺物	3
(1) 西種遺跡.....	3
(2) 東種西の手遺跡.....	3
(3) あわら田遺跡.....	4
(4) 東種遺跡.....	4
(5) 龍橋遺跡.....	4
(6) 上極楽寺遺跡.....	4
(7) 極楽寺上ノ山遺跡.....	4
(8) 極楽寺遺跡.....	5
(9) 須山遺跡.....	6
(10) 丸山C遺跡.....	6
(11) 丸山B(眼目新丸山)遺跡.....	6
(12) 丸山A遺跡.....	7
(13) 堤谷横山窯跡.....	8
(14) 堤谷ギス谷遺跡.....	8
(15) 堤谷村上遺跡.....	9
(16) 柿沢古墳群.....	9
(17) 柿沢城跡.....	9
(18) 亀谷窯跡.....	10
(19) 柿沢神明林遺跡.....	10
(20) その他.....	10
参考文献.....	11
挿 図 第1図 地域区分図	2

図版目次

- 図版1 調査地区現況写真(1)
- 図版2 // (2)
- 図版3 遺物実測図(1) 繩文土器・石器・須恵器、陶磁器
- 図版4 // (2) 繩文土器・石器、陶磁器
- 図版5 // (3) 旧石器、繩文土器・石器、鉄製品、瓦
- 図版6 // (4) 繩文石器
- 図版7 // (5) 繩文石器
- 図版8 // (6) 繩文石器、須恵器、土師器、陶磁器
- 図版9 // (7) 旧石器、繩文土器、土師器
- 図版10 遺物写真(1) 繩文土器・石器・須恵器、陶磁器
- 図版11 // (2) 繩文土器・石器、陶磁器
- 図版12 // (3) 旧石器、繩文土器・石器、陶磁器、土師器、鉄製品、瓦
- 図版13 // (4) 繩文石器
- 図版14 // (5) 繩文石器
- 図版15 // (6) 旧石器、繩文土器、土師器
- 図版16 遺跡分布図(1)
- 図版17 // (2)

第1章 はじめに

1 調査の目的

かあいちまち
上市町に入々の営みが始まったのは、現在知られている限りでは、今から約2万5千年前、上市川左岸の河岸段丘、眼日新丸山においてである。以後、旧石器(先上器)・縄文時代は、この上市川左右両岸の段丘上、弥生時代は、上市川、白岩川をはじめとする河川により形成された扇状地、古墳時代以降は町の平野部全域というように、時代により生活の場は変化する。しかしながら、現在に至るまで連続として人々の生活が続いている。

したがって遺跡の数も多く、1972年(昭和47年)の『富山県遺跡地図』においては41箇所の遺跡が登録されている。そして、江上遺跡に代表されるように、その後新たに発見された遺跡も多く、未発見、未登録の遺跡も少なからず存在するものと考えられる。

ところが、近年の開発行為の増加に伴ない、遺跡の保護と開発との調整が社会問題化してきており、こうした中で、人知れぬうちに消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような中にあって、上市町教育委員会は、郷土の歴史と文化を守り育てるため、また保護と開発との調整のための基礎資料として、遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急務であると考えたのである。

2 調査の経過

以上から、上市町教育委員会では、国庫補助金、並びに県費補助金を得て遺跡詳細分布調査を行うこととした。今回の調査はその2年次目に当たる。

調査対象は、山岳地帯と一部山地を除く全町域をI～V地区に区分し、5箇年を目途に遺跡の所在確認及び遺物の採集を行うこととした。

今回の調査地区は、町の中央部を流れる上市川の上流の種盆地及び左岸の段丘と、町の西部を流れ、白岩川へと続く、須山川・大岩川流域部分である(第1図II)。これらの地区は、大型リゾート計画や、工場誘致などが立案されている地区であり、遺跡の保護上、早急に遺跡の有無、規模、性格を把握する必要性があった。調査の実施にあたっては、便宜上、上市川左岸の段丘及び種盆地と、須山川・大岩川の流域との2地区に区分し、さらに、各地区を村落や水田区画等により、十数箇所の小地域に分けて、対象地域の目安とした。ただ、昨年と同様、今年度調査地区は山間部がかなり多く、分け入ることが困難な地域があったため、一部調査は将来に委ねた。調査地区面積は約200haである。

調査に特参する地図は5千分の1の国土基本図とし、遺物密度の高い場所以外では、原則として1点ごとに地点を記入した。

調査期間は、1989年11月8日から同年11月20日の計8日間、延69人の参加を得て実施した。遺物の整理、実測、写真撮影、報告書の作成は1990年1月から3月にかけて行った。

調査にあたっては、富山大学考古学研究室の協力を得、現地調査の補助員として多くの方々に参加いただいた。記して謝意をしたい。

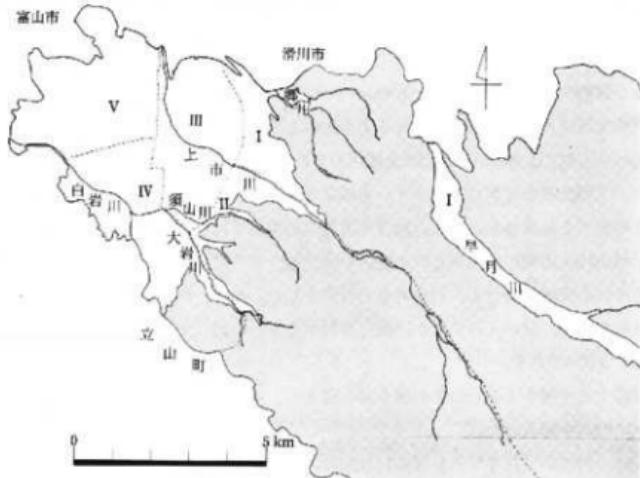
3 上市町の地勢と自然

上市町は、富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川にそって東南から北西に細長く延びる町である。西は県の中心である富山市に東は標高2998mの剣岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。町域は東西約26km、南北約16kmで、面積は約237km²を測る。

地形は実に変化に富んでいる。東部は山岳地帯で、そこをぬうように早月川が流れており、流域に独特の自然景観をもたらしている。西部は、上市川、白岩川によって形成された扇状地が広がり、緑の田園地帯を形づくっている。富山湾岸までの距離は約10kmである。扇状地の扇側部付近は、隆起によってできた河岸段丘が東西に延び、山地との境にまで続く。こうした地形の背後に丘陵があり、剣岳をはじめとする山岳地帯へと続く。これが北アルプス立山連峰で、氷河地形の圓谷（カール）や、火山地形が随所に見られる。町の最高地点、剣岳と最低位の上市川の扇端部までは約26kmで、比高差は約2,950mである。

このように上市町は、東西の比高差が非常に大きく、そのため、照葉樹林、落葉樹林、針葉樹林、低木林とゆうように多様な植物分布を示し、それに伴う複雑な動物相も存在している。

今回の調査は、上市川左岸流域の段丘部分と、須山川、大岩川流域の段丘及び丘陵部分である。これらの地域は、古くから人々の居住に適していたらしく、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡などが知られており、豊かな自然環境を物語っている。



第1図 地図区分図（II地区が1989年度調査区）

第2章 分布調査の成果

1989年度調査によって整理箱3箱分の資料を採集した。遺物総数は、672片で、約30個体余りの土器・石器を確認した。以下遺跡ごとに説明を行う。

1 遺跡と採集遺物（図版1～17）

(1) 西種遺跡（図版16の1）上市町西種

遺跡は、西種集落の北約300mの県道沿いで、周囲の山地から、なだらかに傾斜する地域である。標高は、約301mを測る。

付近一帯は水田及び畠地である。遺跡の東側は、かつて「湧田（あわらだ）」と呼ばれた湿田が広がっており、民俗学的にも注目される地域である。遺跡の北側には、後述する「あわら田遺跡」「東種遺跡」が知られているが、過去にこの地区で遺物が採集された記録はなく、今回の調査で新たに確認された遺跡である。

採集遺物は縄文土器35片、陶磁器28片であった（図版3の1～22・24～28・30～34・37～39・54～56）。

縄文土器は、いずれも磨滅が著じるしく器種や時期的な判別をするだけの資料を欠くが、おおむね縄文時代中期の範囲内に時期設定できるものと考えられる。

1～22・24～28・30～34・54～56はいずれも縄文が施されている。このうち1～22・30・54・55はR L、24～28・31～34・56はL Rの施文がされている。また30・54・55は、縄粒が他の土器に比べて大きい。

磁器は3片を図示した（図版3の37～39）

37・38は染付の碗である。文様から18世紀末のものと考えられる。

39は、小さな碗の蓋で、上面に唐草風の文様が朱の釉で描かれている。

(2) 東種西の手遺跡（図版16の2）上市町東種西の手

遺跡は、東種集落の西側で、白山神社の西に位置する。周辺は前述の湧田が広がっているが、遺跡地内のみ、畠地でやや高台となっている。標高は約300mである。

この地域でも、これまで遺物が採集された記録はなく、今回の調査で新たに確認された遺跡である。

遺物は、縄文土器61片、石器1片を採集した。縄文土器はいずれも細片で磨滅が著じるしく、時期を判別する資料を欠く。しかし、西種遺跡同様、縄文時代中期の範囲内に位置づけられるものと考える。本書には、比較的残りのよい縄文土器3片・石器1片を図示した（図版3の23・29・35・36）。

23は内面に一条の沈線が施されている。胎土は緻密で灰色を呈する。

29は植物繊維痕が見られる。

35は底部である。比較的小形の鉢であろう。胎土内に白色の砂粒が観察できる。

36は灰白色の泥岩で作られた石器である。

(3) あわら田遺跡（図版16の3）上市町東種

遺跡は東種集落の西北約200mの町道沿いに位置する。付近一帯は、諒で、この中から縄文土器が発見されたことに遺跡名も由来する。標高は約296mである。

今回の調査では遺物を採集できなかった。現地は湿田の乾田化に伴う土盛りが行なわれており原地形が若干埋もれてしまったためと考えられる。「上市町誌」（1970、上市町）によれば、中期中葉～後期にかけての遺跡として記載されている。本遺跡の時期は、諒田の成立時期にも係わるもので、今後の調査がまたれる。

(4) 東種遺跡（図版16の4）上市町東種

遺跡は、あわら田遺跡の北西約100mの山林中に位置する。付近一帯は数年前に植林されたとのことで、遺物は採集できなかった。「富山県遺跡地図」（1972 富山県教育委員会）によれば、縄文時代中期の遺跡と記載されているが、詳細は今後の調査に委ねたい。

(5) 龍橋遺跡（図版16の5）上市町上極楽寺

遺跡は、上市川の左岸の段丘上で眼下に上市川発電所を臨む標高155mの地点に所在する。付近一帯は山林であるが、この龍橋周辺が平端な台地となっている。

今回の調査では、縄文土器4片、土師器1片、陶器2片、磁器1片を採集したが、このうち、5片を図示した（図版3の69～74）。

69は、越中瀬戸の瘤目が施されている。

70・71は、縄文土器である。胎土は灰白色を呈しており、焼成は荒い。2片とも深鉢の口縁部付近と思われる。外面に粘土帶の繰り目と思われる陵が残る。

73は、越中瀬戸の瓶である。口唇部がやや肥厚し、外湾する。釉は内外面とも鉄釉が施されている。

74は、土師器の瓶である。口縁が丸く、R字状を呈する。内面はナデによる調整がされている。

以上であるが、どの遺物も断片的で、時期決定をするまでには至らない。縄文時代から何らかの形で人々の営みがあったことがうかがわれる。

(6) 上極楽寺遺跡（図版16の6）上市町上極楽寺

遺跡は上市川の左岸の段丘上で極楽寺集落の南西約500mの地点に位置する。標高は約130mで、付近一帯は水田である。

今回の調査では遺物は採集されなかった。これは、ほ場整備により土地区画がなされた際に遺跡の大部分が盛土により埋められているためであろう。「富山県遺跡地図」によれば、縄文時代前期から中期の遺跡として記載されている。

(7) 極楽寺上ノ山遺跡（図版16の7）上市町極楽寺

遺跡は、上市川左岸の標高約200mの山上に位置する。付近はかつて畠地であったと思われるが、現在は荒地となっており、今回の調査では、遺跡の確認はできなかった。「富山県遺跡地図」によれば、縄文時代中期と記述されている。

(8) 極楽寺遺跡（図版16の8）上市町極楽寺

遺跡は上市川の左岸の段丘上、標高120mの極楽寺地内に位置する、段丘直下との比高差は約10mで遺跡はこの段丘端に所在する。付近一帯は、水田、畠地である。

本遺跡は、古くから滑石製の玉類を出土する遺跡として知られており、昭和38年には、富山考古学会、県教育委員会、上市町教育委員会等により発掘調査が行なわれている。

今回の調査では、繩文土器片60片、土師器1片、磁器1片、陶器16片、石器8片を採集した。このうち繩文土器は54片を図示した（図版4の1～54）

1～8・10～20・24～29・53は、いずれも羽状繩文が施されている。このうち、12・13・24・25は、纖維を含む、いわゆる纖維土器である。28は、ドングリ状の圧痕が見られる。53は、丸底の深鉢の底部で纖維土器である。

9は、貝殻腹縁を押しつけた、いわゆる貝殻文を綾杉状に施文した土器である。口縁部で、口唇部が外反する。胎土、焼成は他の土器に比して粗悪で、纖維を含んでいる。

2・30・32・34・40・45・54は撚糸文が施されている。いずれもも焼成がよく、器厚が他の土器に比してやや厚い。

22・23・31・33・35～37・39・41～44・46・48～52はいずれも細粒の繩文が施されている。このうち、31は内面に条痕が施されている。33は口縁部で口唇部が丸く、内外面ともに施文されている。

38・47は、半截竹管による施文がなされており中期の土器と考えられる。

以上から上器については一部を除き繩文時代前期初頭の極楽寺式を代表するものが多く採集されているが、38・47のように中期に含まれる土器も混入しており、留意が必要である。

石器は8片を採集した（図版4の55～62）。

55は蠟石製の未製品である。全体に磨きがかけられており、ペンダント状の製品となるものであろう。ただ極楽寺の玉類には、この形を半切し、玦状製品を作製する場合もあるとのことである（藤田氏の御教示による）。全長は3.6cmである。

56は玦状耳飾りの未完成品である。円筒状の成形は磨がかれたものというより、すり切りの調整が行なわれている。石材は蠟石で径1.5cm、厚さ約0.8cmである。

57は玦状耳飾りで、環の切断過程のものであろう。中央に穿たれた穴は、正円ではなく不成形の穴で、スリ切られたというよりは、モミ切りであけられたものようである。径1.8cm、厚さ0.6cmで、中央の穴は長径0.8cm、短径0.6cmの不正円である。

58は、小形の磨製石斧である。全長4.6cmで、ち密な調整が施されている。刃部は片刃で片刃面の研ぎ出しは刃と平行して行なわれている。石材は粘板岩である。

59は玦状製品の一部である。切損が著じるしいが、片面がすり切られて調整されている。全体として橢円状の製品で長径約4cm短形約3cmと推定される。石質は蠟石である。

60は玦状耳飾りの一部である。環の切断部が明瞭に観察できる。これは欠損しているが、欠損の後、一部が磨かれており、次加工痕を残している。（藤田氏の御教示による。）

61は、イーエス・エスキューである。石材は硬質頁岩である。

62は、硬質頁岩の剝片である。こうした剝片は玦状耳飾りの穴あけ具となる可能性があるものと考えられる。

(9) 須山遺跡（図版16の9）上市町須山

遺跡は須山川の上流で、須山部落の南東約100mに位置する。標高は約140mで付近一帯は水田畑地である。

今回の調査では、石器1片、陶器片3を採集するのみであった。「上市町誌」においても明確な記述ではなく、遺物が少なく時期等の判断材料を欠く（図版8の3・5）。

3は凹石である。ほぼ中央に2箇所の窪みがある。全長は約10cmで、重量は約800gである。石材は花崗岩である。

6は、越中瀬戸の碗である。口縁部で黒色釉が施されている。

(10) 丸山C遺跡（図版17の1）上市町丸山

遺跡は上市川左岸の丸山段丘で、県立上市高校丸山農場に隣接している。標高は約94mで、付近一帯は畑地である。

今回の調査では、縄文土器片21、石器2片、陶器1片を採集した。

縄文土器はこのうち5片を図示した（図版4の79～83）。

79～81は、いずれもL Rの縄文が施されている。焼成は良好であるが、文様は磨滅が著しい。

82は、表面がやや黒みを帯びており、条痕が施されている。

83は、深鉢の口縁である。波状口縁の一部で、口唇部が肥厚する。墻面に爪形紋が付随するもので、縄文時代・中期中葉に属するものであろう。

78は、越中瀬戸の壺鉢である。内外面とも鉄釉が施されている。

石器は、2点を図示した（図版5の38・41）

38は、スリ石である。ほぼ球形に近い形で、径が約7.5cm、重量500gである。石材は花崗岩である。

41は、磨製石斧である。上半分が欠損しているが、比較的精密な作りである。石材は砂岩である。

以上から丸山C遺跡は、縄文時代中期の遺跡であると考えられる。

(11) 丸山B（眼目新丸山）遺跡（図版17の2）

遺跡は、上市川左岸の丸山段丘上で、丸山集落の南東約300mに位置する。付近は畑地と、旧小学校の跡地である。標高は93mである。

本遺跡は、古くから縄文時代の土器石器が出土することが知られていたが、昭和23年頃の小学校の校庭拡張の際、森秀雄氏により旧石器が発見されている。この意味で、丸山B遺跡と眼目新丸山遺跡は重複するが、層序的には両者は明確に区別される。

遺物は、縄文土器42片、石器8片、土師質土器片1、陶器1を採集した。

縄文土器はこのうち30片を図示した（図版4の84～113）。

84・87・91～94・97・101～106・112・113はいずれもLRの縄文が施されている。

89・100・108・111は半隆起線文と撚糸文で施文されているもので、縄文時代中期前葉の土器であろう。

86・88・95・96・99・110は、半隆起線文と隆帶で文様が構成されている。同じく縄文時代中期前葉の土器と考えられる。

85は、口縁部である。磨滅しているが、隆線と瓜形紋が観察できる。縄文時代中期中葉まで下るものかもしれない。

90は、半截竹管文を一度施し、後に縄文を施すものである。

107は、他の土器に比して器厚があり、半截竹管文が施されている。

石器は、8点を図示した（図版5の39・42～47）

39は、砂岩質の砥石である。2本の磨き跡が残っている。

42は、磨製石器である。残存部分で約10cmの全長である。石質は砂岩である。

43～45はいずれも砂岩質の砥石の一部である。

46は、剥片で刃部が観察できる。石材は頁岩で、縄文時代のものであろう。

47は、9月に行なった農地転用に伴う試掘調査の際、搅乱層の中で出土した旧石器で眼目新丸山遺跡の資料として掲載するものである。石器は細長の剥片で、打面調整が観察される。一部刃部が見うけられる。いわゆる東山系のグレイバースポールであろう（橋本正氏御教示による）。

土師質土器34は、皿の口縁部である。口唇部がやや肥厚する。内外面ともハケナデ調整が行なわれている。

陶器片36は、越中瀬戸の皿である。内外面ともに茶色の鉄釉が施されている。口縁部に段が見られる。

② 丸山A遺跡（図版17の3）上市町丸山集落内

遺跡は上市川の河岸段丘上、通称五斗坂といわれる坂の両側、中でも西側の屋敷林の中に位置する。標高は約82mである。

今回の調査では、縄文土器片40片、石器20点、瓦1片を採集した。

縄文土器は28片を図示した（図版5の1～22・26・27・29～31）。

1・3・9・18・21・25・27・31はいずれも条痕文土器である。これらの上器は縄文時代後期に位置づけられるものと考えられる。なかでも31は、口縁部が外反し縦位に施文する縄文時代晚期前半の中型式に属するものと考えられる。また1には、モミ状の圧痕が観察できる。

2・4・14・17は、削り消し縄文が施されている。このうち4は口縁部である。口唇部がやや外反している。

29は、9月に行なわれた試掘調査に伴う遺物である。口縁部であるが、全体に磨滅が著じるしい。口縁がややくびれ、内湾している。

30は、深鉢の底部である。無文の破片であるが、一部、磨きがかけられている。

石器は20点を図示した（図版6・7・8の1・2・5）。

（図版6の1～9）。

1は、石刀で、大きな礫から剝離された剝片で、裏面は未調整である。刃部が作られており、石材は安山岩である。全長約14cmで、重量は550gである。

2～7は、いずれも打製石斧である。いずれも刃部から1/3が欠損しており、形もいわゆるバチ形の石器である。石材は2・3・5・6が安山岩、4・7が凝灰岩質のものである。

8・9はいずれも凹石である。中央部に窪みが2箇所あり、いずれも砂岩質である。8は長径約11cmで、重量は800gである。9は長径11cmで重量550gである。

（図版7の1～7）

1～5・7はいずれもスリ石である。石材はいずれも花崗岩である。1は、長径10cm、短径8cmで、重量は900gである。2は、長径11.5cm、短径9.5cmで、重量は1kgである。3は長径13.5cm、短径11cmで、重量は1.3kgである。4は長径7.5cm、短径5.5cmで重量は350gで他のものに比べて小型のものである。5は長径9cm、短径8cmで、他のものよりやや扁平なものである。重量は500gである。7は、長径11cm、短径9.9cmで重量は1kgであった。

6は中央部分がタタキ調整されており、小型の石皿等の未完成である可能性がある石材は砂岩である。

（図版8の1・2・5）

1は、石皿の未完成であろう。全体に細かなタタキ調整が行なわれている。しかし中央部には使用痕が認められ、未完成品のまま使用されていたものと考える。大きさは残存部分で長辺21cm、短辺35.5cmである。石材は砂岩である。

2は、花崗岩製の石皿である。内面に使用痕が認められる。大きさは長辺12.5cm、短辺10.5cmである。

5は、砂岩系の石材で作られたスリ石である。長径11.5cm、短径10.5cmで、重量950gである。

（13）堤谷横山遺跡（図版17の4）上市町堤谷横山

遺跡は丸山集落と堤谷集落の中ほど、県道極楽寺、湯神子線沿の標高78.5mの雜木林中に位置する。

今回の調査では、幅2m、長さ約8m前後の窓跡1基を確認したが、雜木が多く遺物を採集することができなかった。『上市町誌』中の写真及び、森秀雄氏所蔵の須恵器などからみて6世紀後半に位置づけられよう。

（14）堤谷ギス谷遺跡（図版17の5）上市町堤谷ギス谷

遺跡は堤谷集落の東側約200mの山中に位置する。標高は、97.2mで、付近一帯は墓地、雜木林である。

本遺跡は1985年9月に行なわれた墓地道路新設の際の試掘調査で、確認された遺跡であり、本年度調査において正式報告するものである。

遺物は、ナイフ型石器一片である（図版9の147）。

石材は硬質頁岩で、全長3.9cm、厚さ3mmの小形で偏平なナイフ型石器である。類似する石器を県内に探せば、大沢野町直坂遺跡第3地区の尖頭器に近いナイフ型石器と同期のものではないかと考えられる（橋本正氏御教示による）。

(19) 堤谷村上遺跡（図版17の6）上市町堤谷村上

遺跡は堤谷集落の南西隅に位置する。付近一帯は水田・畑地で、すぐ横を広域農道（スーパー農道）が走る。標高は約54mである。

遺物は縄文上器片139片、土師器7片であった。

縄文土器は121片を図示した（図版9の19～35・37～140）

採集した土器は隆帯や半截竹管文と、ヘラ状工具による連続刻目により構成されるものが多く、縄文時代中期中葉に位置づけられると考える。

19は深鉢の口縁部で口唇部に突起部が残る。

20～22・44・63・71はいずれも口縁部で、隆帯がめぐるものである。

39・64・67・77・132・133・136はいずれも隆帯にヘラ状工具による連続刻目を施すもので、縄文時代中期中葉の天神山式に比定される。

24・26・27・29～35・58はR Lの縄文が施されており、縄文粒はやや小さい。これに対して、58・82・88・124・135はL Rの施文が見られ、縄文粒は大きい。

126は、貼り付けによる玉を施している。

土師器は7片を図示した（図版9の36・141～146）

36は外面縦方向にクシ描が施されており、内面も斜めにクシ描が施されている。胎土はやや粗く、他の物よりやや古い時期のものかもしれない。

141・143～146はいずれも外面にハケナデが観察される。

142は外面に押圧されたと思われる沈線が見られる。

(20) 柿沢古墳群（図版17の7）上市町柿沢

古墳群は堤谷集落と柿沢集落の間の通称觀音堂と呼ばれる山中に所在する。標高100～130mの山頂部に大小18基の円墳が群をなして確認できる。この古墳群は1981年、藤田富士夫氏により確認されている。これは、古墳時代後期の典型的な群集墳で、大小の古墳が規則的に組み合わされている（藤田1983）。この古墳群は県東部に残る唯一の例であり、注目される。

(21) 柿沢城跡（図版17の8）

城跡は、柿沢集落の南東の通称柿沢山の標高130mから170mの尾根上に位置する。城跡最高所と麓との比高差は約110mを測り、尾根の両側は急傾面の要害である。

この城跡は1982年、高岡徹氏によって確認されている。以下、城跡の概要を記す。

城跡は、山頂や山腹、尾根を削った郭や空堀、土塁などの防衛施設を主体に構成されるいわゆる中世山城の典型的なものである。柿沢城の場合、南東から北西にゆるやかに下降した尾根上に7つの郭を連ねたものである。このうち最上部にある郭は土塁がめぐらされており城跡の中枢をなすものと考えられる。郭の広さは東西約14m、南北約16mである。この郭から北西に下降して

6箇所の郭が階段状に設けられている。郭の規模は順に、4m×18m、23m×18m、18m×41m、20m×26m、20m×21m、5m×18mと大小さまざままで、その間に2箇所の空堀が確認できる。

文献上、柿沢城は江戸時代の書上帳などに「柿沢城山」「柿沢村古城」などの記載が見られたが、その所在が明確に確認された。

(18) **亀谷窯跡** (図版17の9) 上市町柿沢南谷

遺跡は、柿沢古墳群と柿沢城跡の間の谷あい、通称南谷の標高121mの地点に所在する。ここには砂防堰堤がありその北東約10mに窯跡が確認できる。

付近一帯は、雜木林で、遺物を採集することはできなかったが、窯跡そのものの残存状況は良好であった。

(19) **柿沢神明林遺跡** (図版17の10) 上市町柿沢神明林

遺跡は、柿沢古墳群のある山の麓で、須山川の左岸、標高約55mの地点である。付近一帯は畠地、山林である。現在まで、この周辺で遺物が採集された記録はなく、今回、新たに確認された遺跡である。

遺物は、縄文土器18片、土師器1片、須恵器1片、陶磁器2片を採集した。

縄文土器は18片を図示した (図版9の1~18)。

1~18はいずれも縄文が施されているが、磨滅が著しく、時期を判別することは困難である。

土師器は図版8の20がある。器台の受部と思われ、脚部との結合部の破片である。

陶磁器は、2片を図示した (図版8の8・9)

8は、白磁の皿である。外面に一条の線がめぐる。

9は、瀬戸・美濃系の皿である。内外面とも灰釉が施されている。

(20) **その他**

遺跡として設定した地区以外でも遺物が採集されている (図版3の40~53・57~68・75~82・

図版4の63~69・70~77、図版5の23~25・28・32・35~37、図版8の4・10・12・15~19・21~23)。以下地区ごとに説明を加える。

図版3の40~53・57~68は、種地区の採集遺物である (図版16のイー11~3)。

遺物は、瀬戸・美濃系陶器、越中瀬戸、染付などがあるが、染付の49などに見られるように18世紀代のものが多いが、65など大目茶碗と思われるものも若干含まれており、16世紀代まで遡るものも見られる。種地区は、落人伝説の残る地域で、その開村も中世に遡る所にも起因するものと思われる。

図版4の63~69・70~77は、滝橋から丸山地区までの上市川左岸の段丘上の採集遺物である (図版16のイー5~7)。

66・67などの染付に代表されるように18世紀代の遺物が多いようであるが、64の土師器、65の須恵器なども点々と見受けられ、注目される。

図版3の75~82、図版5の23~25・28・32、図版8の4・12は、丸山集落の西側の地区である

(図版17のロー1)。

岡版3の82の染付や79の甕に見られるようにこの地区でも18世紀代の遺物が見られるが、岡版5の23~25・28、岡版8の4などのように縄文時代の遺物が点々と見られ、近くに縄文時代の遺跡の存在をうかがわせる。

岡版5の35・37・46、岡版8の10・15~19・21~23は堤谷から柿沢・大松地区にかけて採集された遺物である(図版17のロー2~ロー7)。

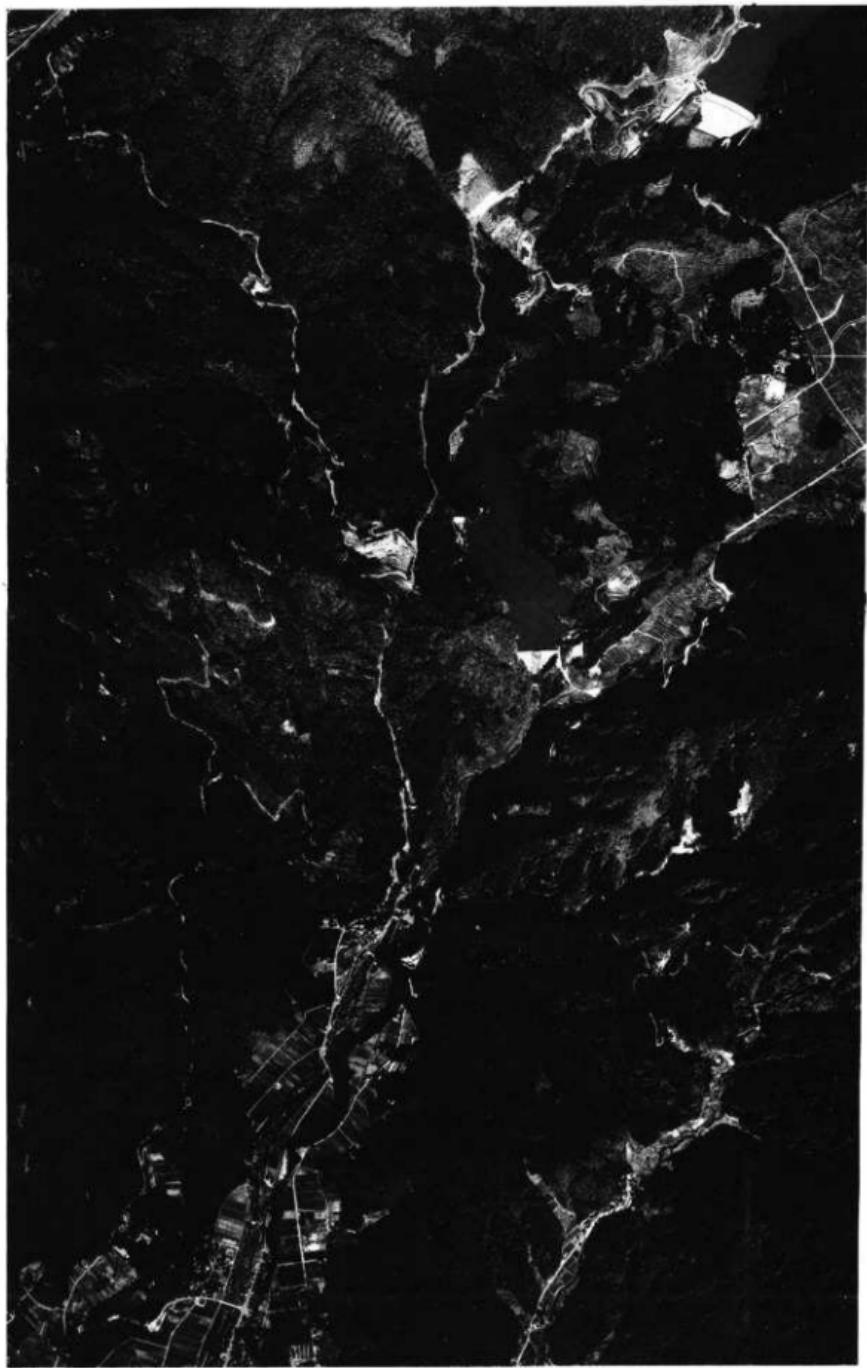
このうち岡版8の14・23は須恵器の胸部と杯蓋で、堤谷横山窯、亀谷窯の存在と関連があるものと思われる。

以上であるが、今回の調査では5箇所の遺跡を新たに確認した。このうち、堤谷村上遺跡、柿沢神明林遺跡は、須山川の左右両岸に位置しており、またその下流にも縄文時代の遺跡があることを考え合わせると、上市川沿岸と同様に今後数多くの遺跡が確認される可能性がある。

参考文献

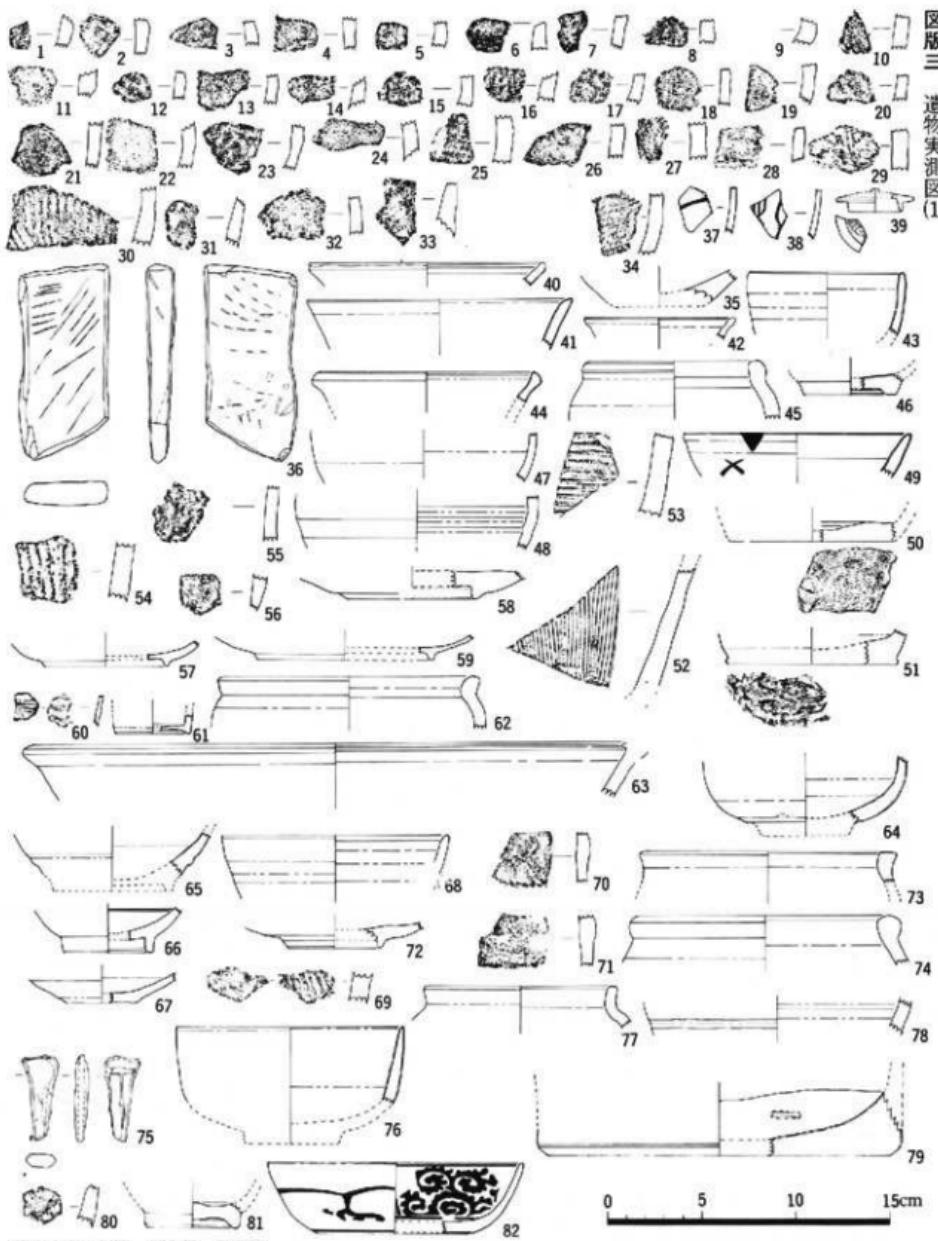
- 1 上市町「上市町誌」1970年。
- 2 上市町教育委員会『弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』1985年。
- 3 上市町教育委員会『水代遺跡緊急発掘調査概要』1985年。
- 4 小島俊彰「北陸の縄文時代中期の編年—戦後の研究歴と現状」『大境』第5号、1974年。
- 5 大門町教育委員会『串田新遺跡』II、大門町埋蔵文化財調査報告書第2集、1981年。
- 6 大門町教育委員会『串田新遺跡』IV、大門町埋蔵文化財調査報告第4集、1982年。
- 7 高岡徹「富山県」「日本城郭体系」7新人物往来社、1980年。
- 8 高岡徹「富山県上市町柿沢城と国入土肥氏の城館配置」『かんとりい』No.6、越中の歴史と文化を考える会、1982年。
- 9 立山町教育委員会『立山町史』上巻、1977年。
- 10 立山町教育委員会『白岩城ノ上遺跡・吉峰遺跡』富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概要、1981年。
- 11 立山町教育委員会『富山県立山町総合公園内野沢孤幅遺跡緊急発掘調査概要』I、1983年。
- 12 立山町教育委員会『富山県立山町総合公園内野沢孤幅遺跡緊急発掘調査概要』II、1985年。
- 13 立山町教育委員会『立山町埋蔵文化財分布調査報告II』1987年。
- 14 富山県「富山県史」考古編、1972年。
- 15 富山県教育委員会「富山県大沢野町直坂II遺跡発掘調査概要」1976年。
- 16 富山県教育委員会「極楽寺遺跡発掘調査報告書」1965年。
- 17 富山県教育委員会「富山県埋蔵文化財調査報告書」II、1972年。
- 18 富山県教育委員会「富山県大門町串田新遺跡発掘調査概要」1973年。

- 19 富山県教育委員会「富山県遺跡地図」1972年。
- 20 富山県教育委員会「富山県立山町岩峰野遺跡緊急発掘調査概要」1976年。
- 21 富山県教育委員会・魚津市教育委員会「天神山遺跡調査報告書」1959年。
- 22 藤田富士夫「富山」、日本の古代遺跡13、保育社、1983年。
- 23 藤田富士夫「玦状耳飾」、縄文文化の研究7、雄山閣、1983年。
- 24 森 秀雄「大昔の富山県」1950年。
- 25 八尾町教育委員会「富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告」1985年。
- 26 八尾町教育委員会「富山県八尾町長山遺跡発掘調査概要(2)」1986年。
- 27 八尾町教育委員会「富山県八尾町長山遺跡発掘調査概要(3)」1987年。
- 28 八尾町教育委員会「富山県八尾町長山遺跡発掘調査概要(4)」1988年。
- 29 八尾町教育委員会「富山県八尾町長山遺跡発掘調査概要(5)」1989年。
- 30 吉岡安暢「加賀・珠洲」世界陶磁全集3、日本中世、1977年。



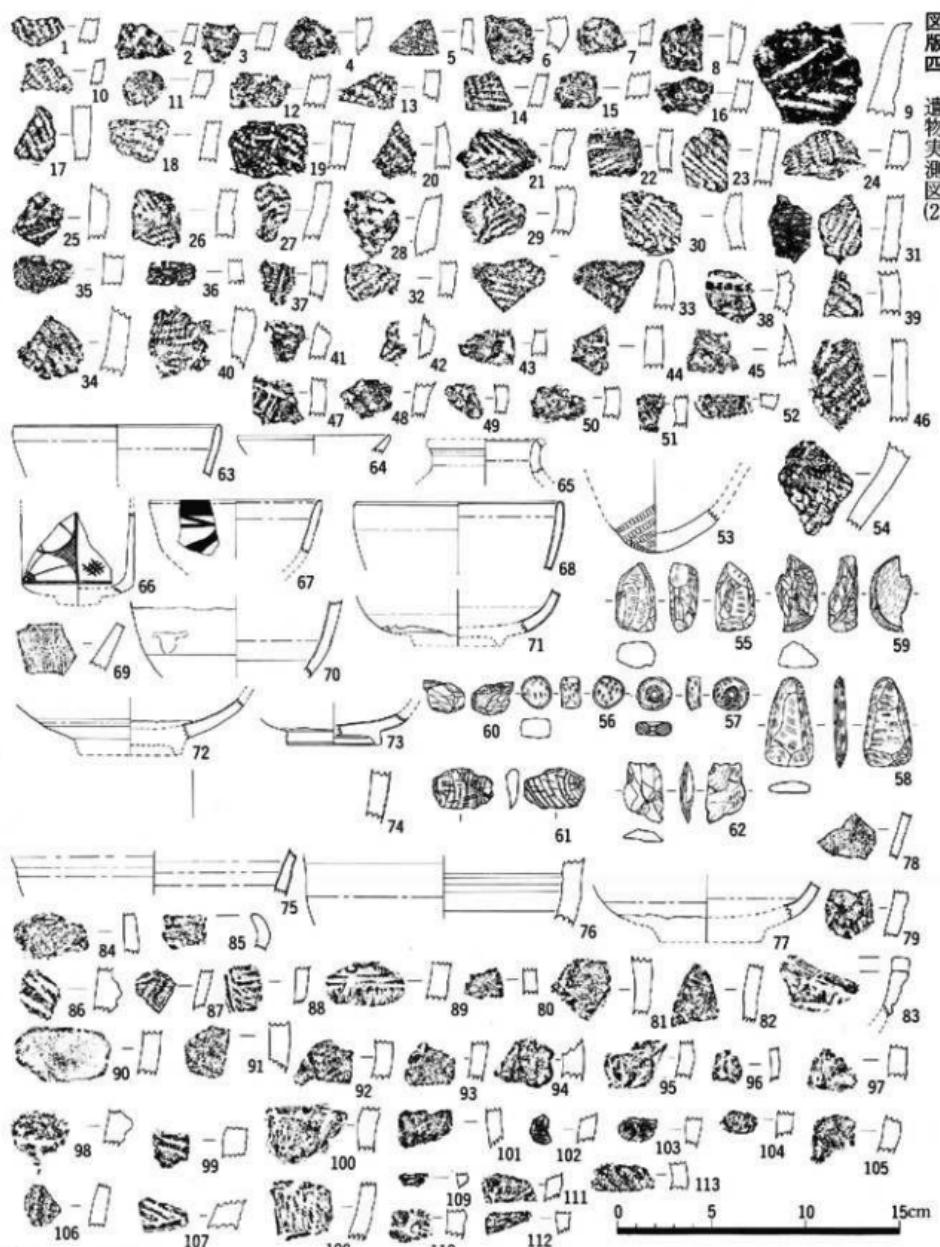
図版二 調査地区現況写真





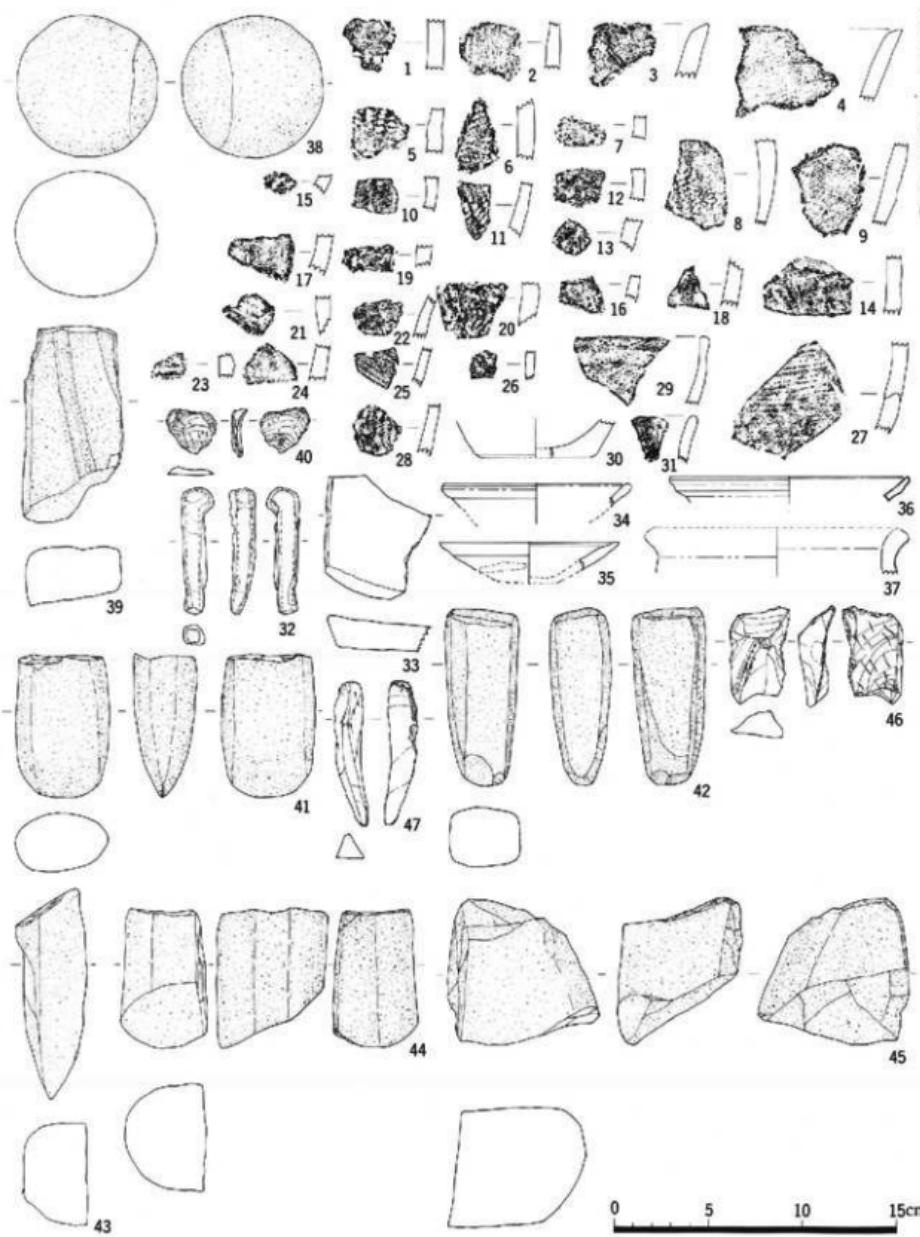
縄文土器・石器・須恵器・陶磁器

(1~22・24~28・30~34・37~39・54~56: 西種遺跡, 23・29・35・36: 東種西の手遺跡, 69~74: 龍橋遺跡, 40~42・44~45~48・52: I-1 地区, 41・49・57~68: I-2 地区, 43・50・51・53: I-3 地区, 75~82: II-1 地区, 箱尺1/3, 図版10参照)



縄文土器・石器、陶磁器

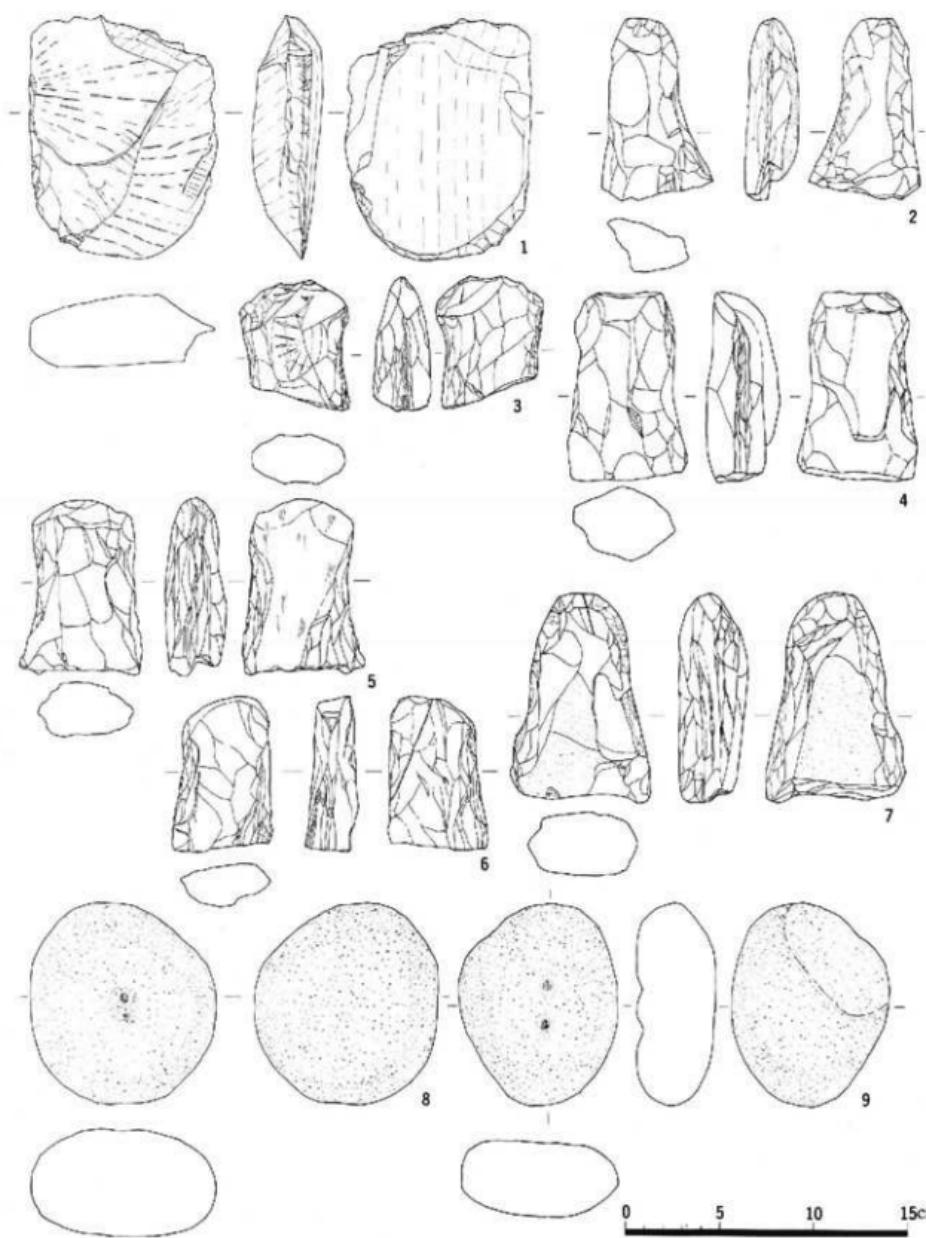
(1~62: 極楽寺遺跡, 78~84~113: 丸山B遺跡79~83: 丸山C遺跡, 63~69~72~76: イ-7地区, 70~71~73~75~77: イ-6地区, 補尺1/3 図版11参照)



旧石器・縄文土器・石器・陶磁器・鉄製品・瓦

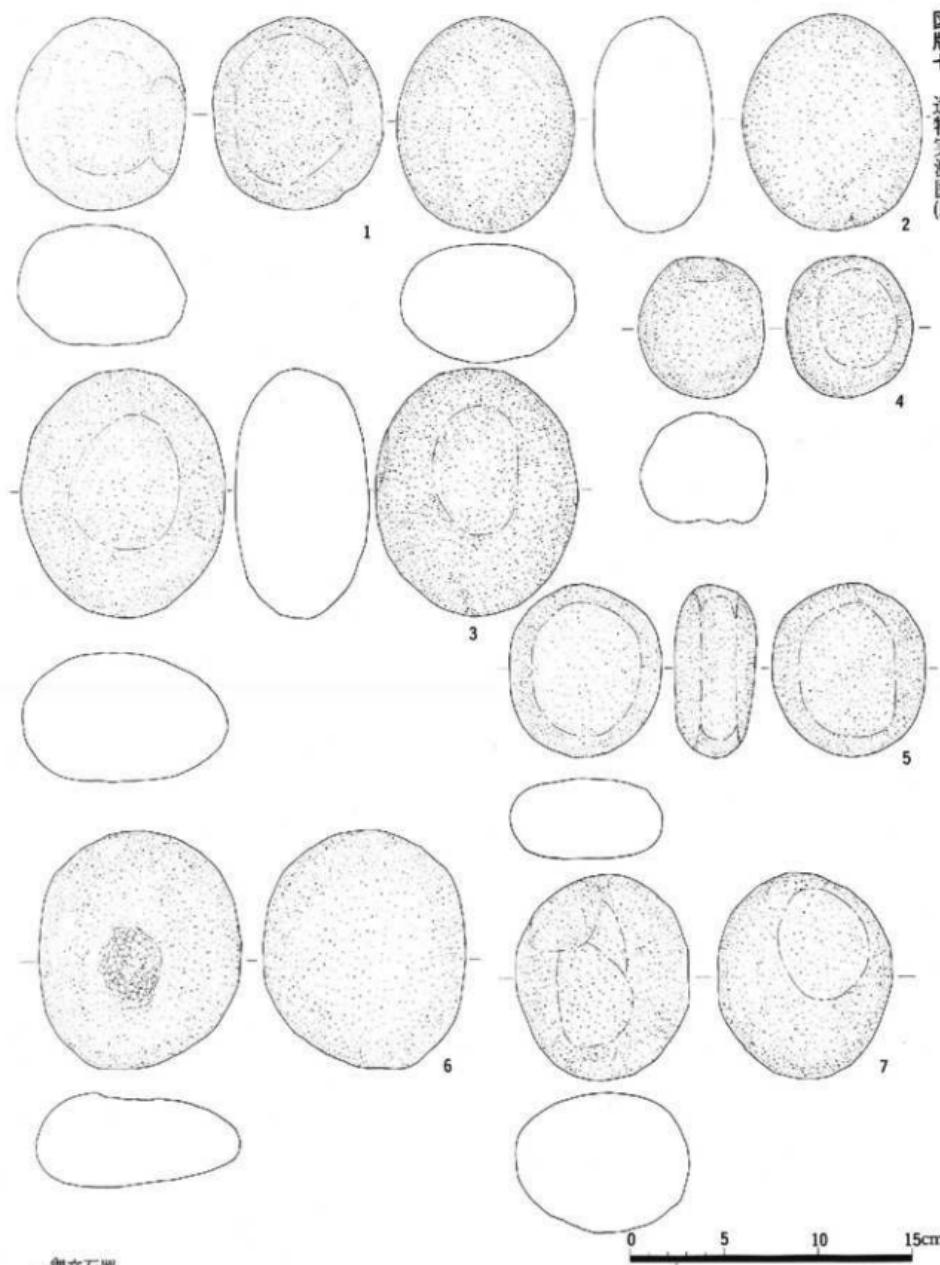
(1~22・26~27・29~31・33~40:丸山A遺跡, 34・36・39・42~45・47:丸山B(眼目新丸山)遺跡, 38・41:丸山C遺跡, 23~25・28・32:□-1地区, 46:□-5地区, 35:□-6地区, 37:□-7地区, 縮尺1/3, 図版12・14参照)

図版六 遺物実測図(4)



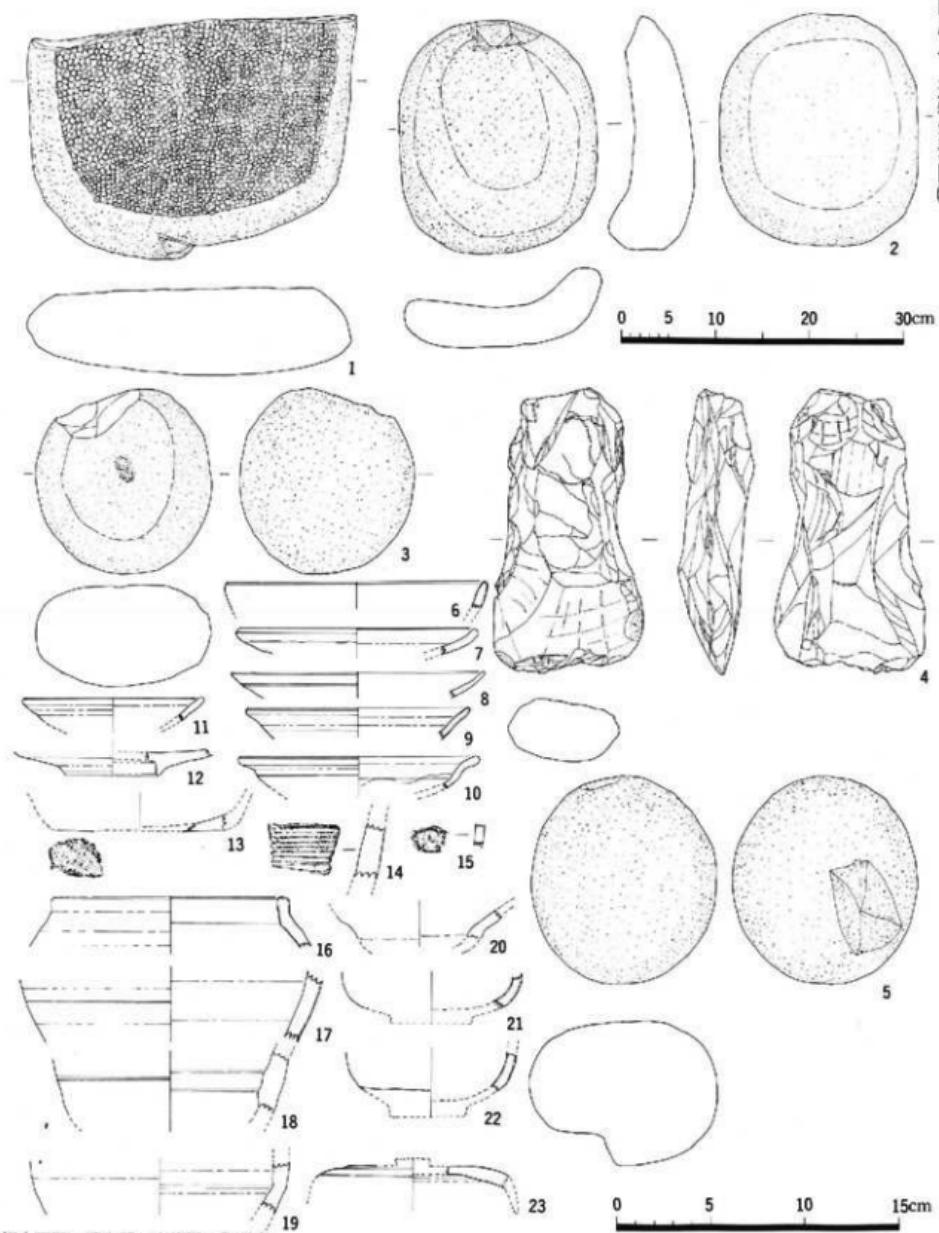
縄文土器

(1~9:丸山A遺跡、縮尺1/3、図版13参照)



龜文石器

(1～7：丸山A遺跡，縮尺1/3，圖版13・14参照)



縄文石器・須恵器・土師器・陶磁器

(1・2・5: 丸山A遺跡, 3・6: 稜山遺跡, 7・11・13: 堤谷村上遺跡, 8・9・14・20: 柿沢神明林遺跡, 4・12: □-1地区, 10・15・16: □-2地区, 22・23: □-3地区, 17~19・21: □-4地区, 1・2: 縮尺1/6, 3~23: 縮尺1/3, 図版12・13・14参照)

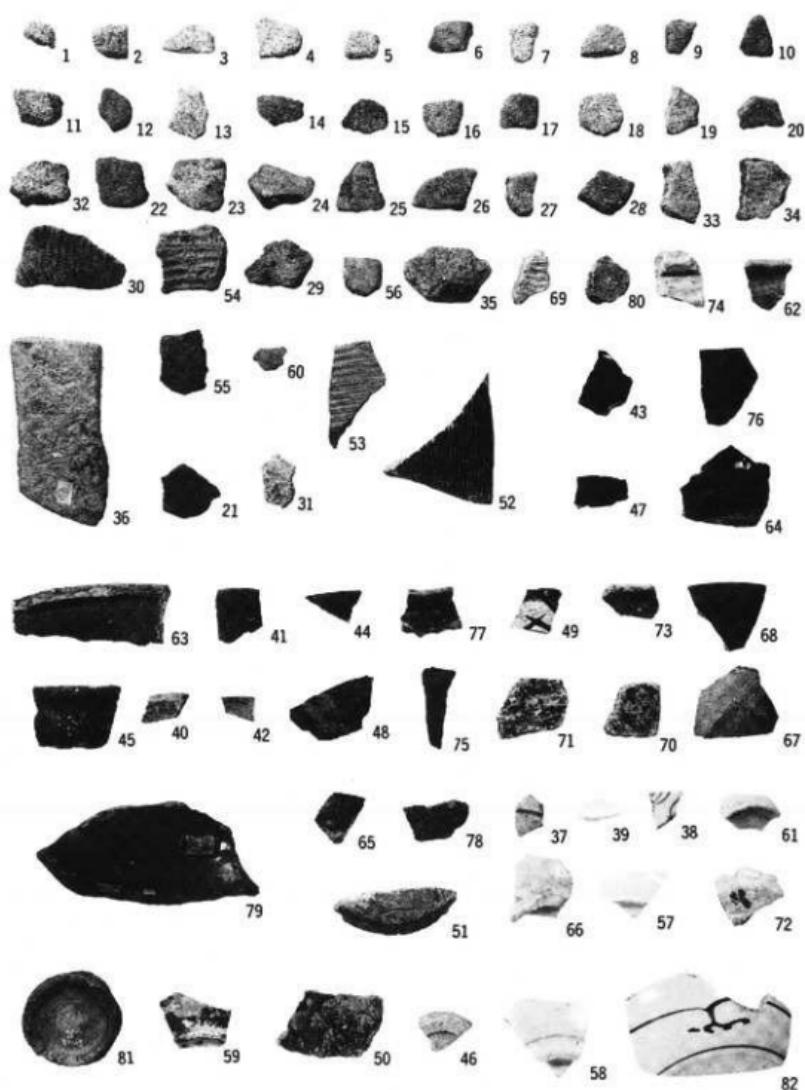


0 5 10 15cm

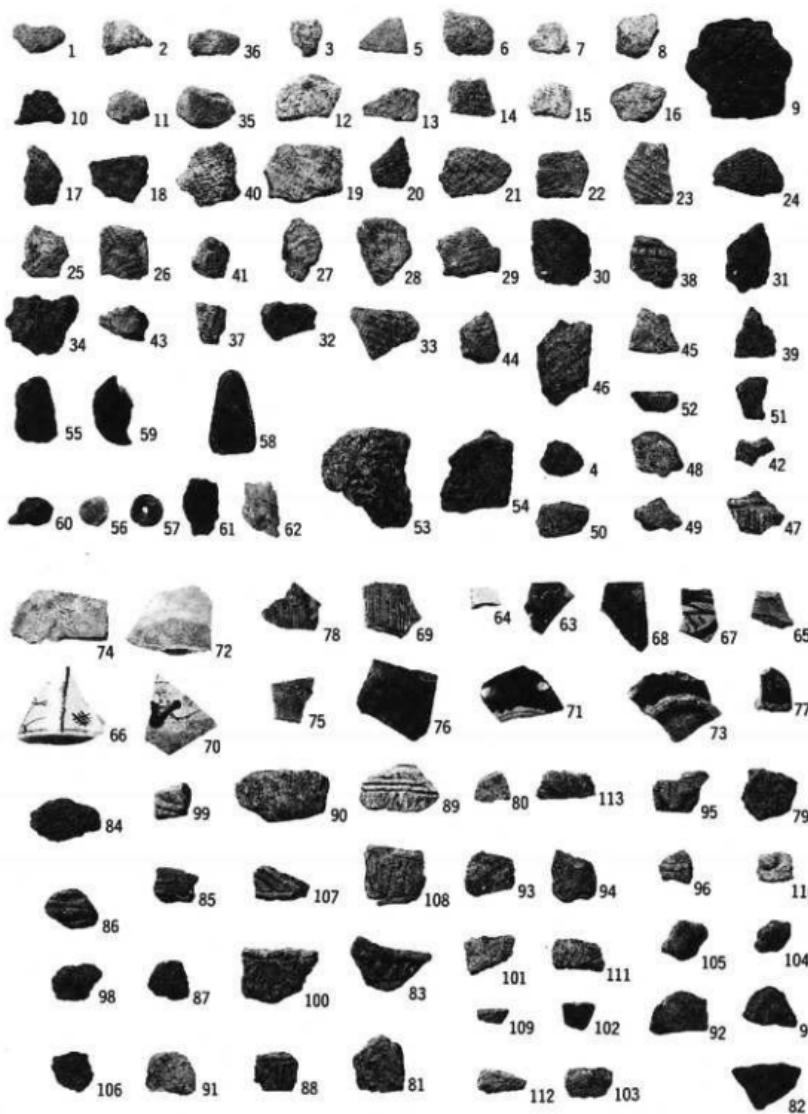
旧石器・縄文土器・土師器

(1~18: 柿沢神明林遺跡, 19~146: 堤谷村上遺跡, 147: 堤谷ガス谷遺跡, 縮尺: 1/3, 図版15参照)

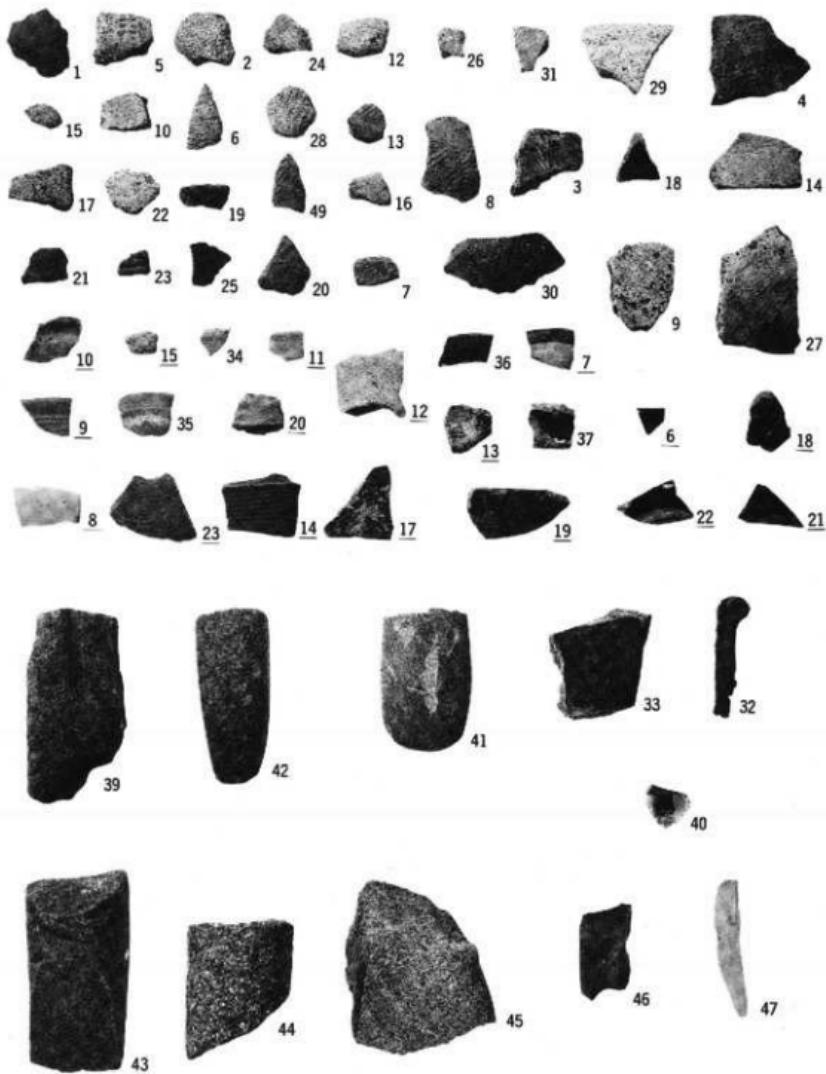
写-3



縄文土器・石器、須恵器、陶磁器（図版3参照）

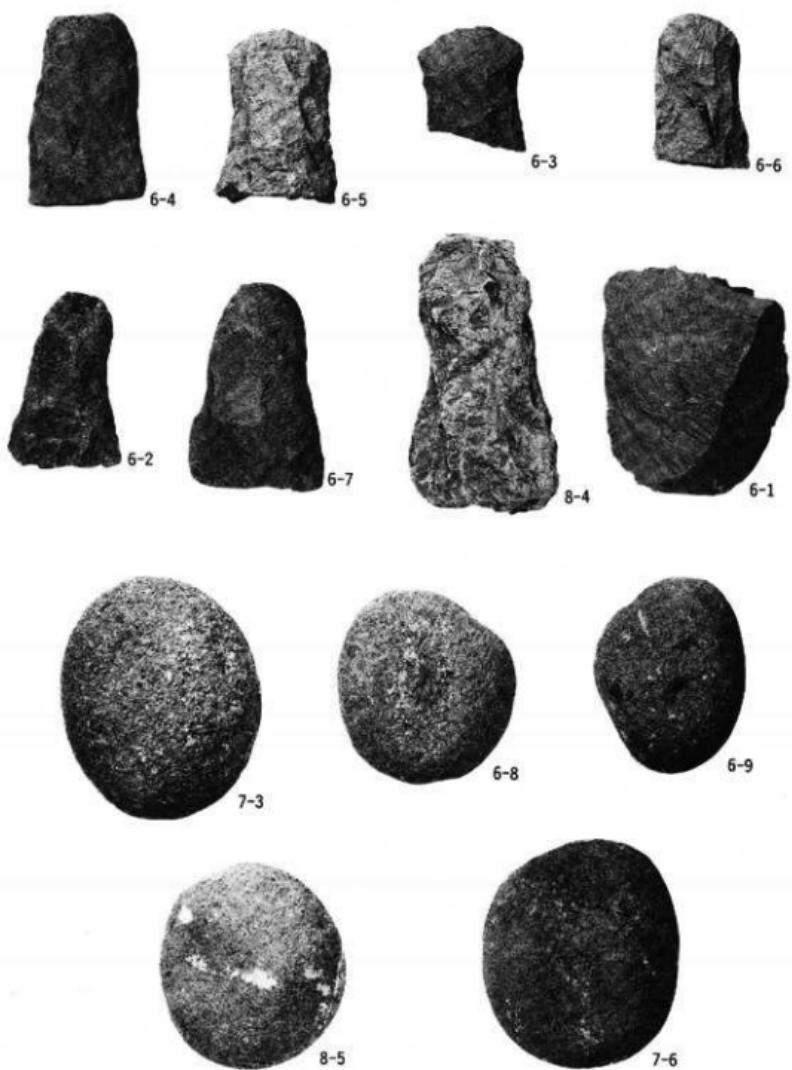


縄文土器・石器、陶磁器(図版4参照)



旧石器・繩文土器・石器、陶磁器、土師器、鉄製品、瓦(図版5、8参照)

写-6



縄文石器（図版6，7，8 参照）

写-7



7-1



8-3



7-7



7-5



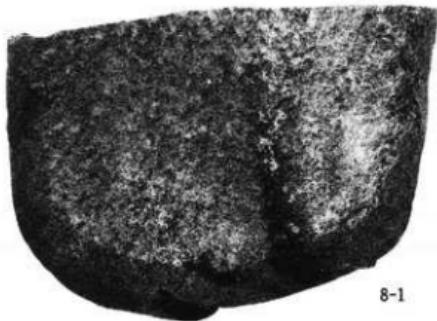
7-2



5-38



7-4



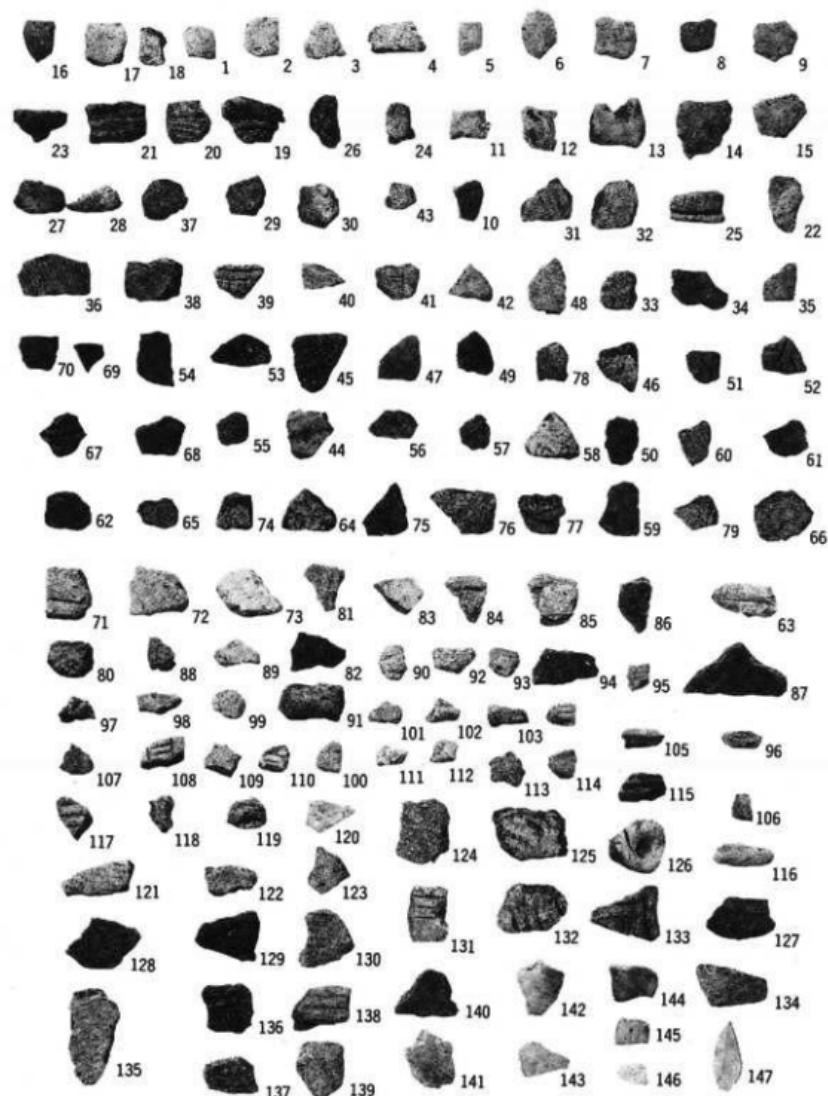
8-1



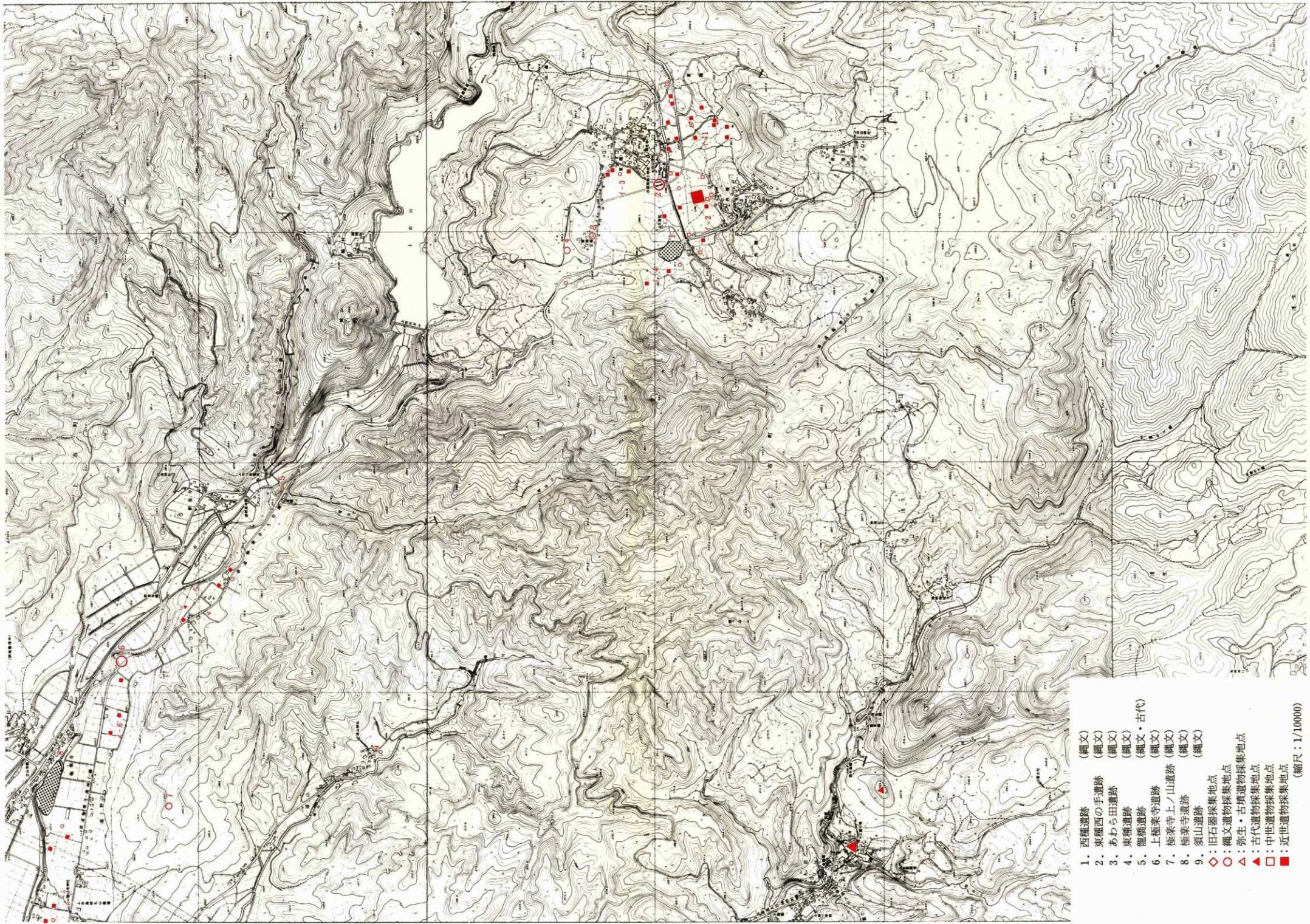
8-2

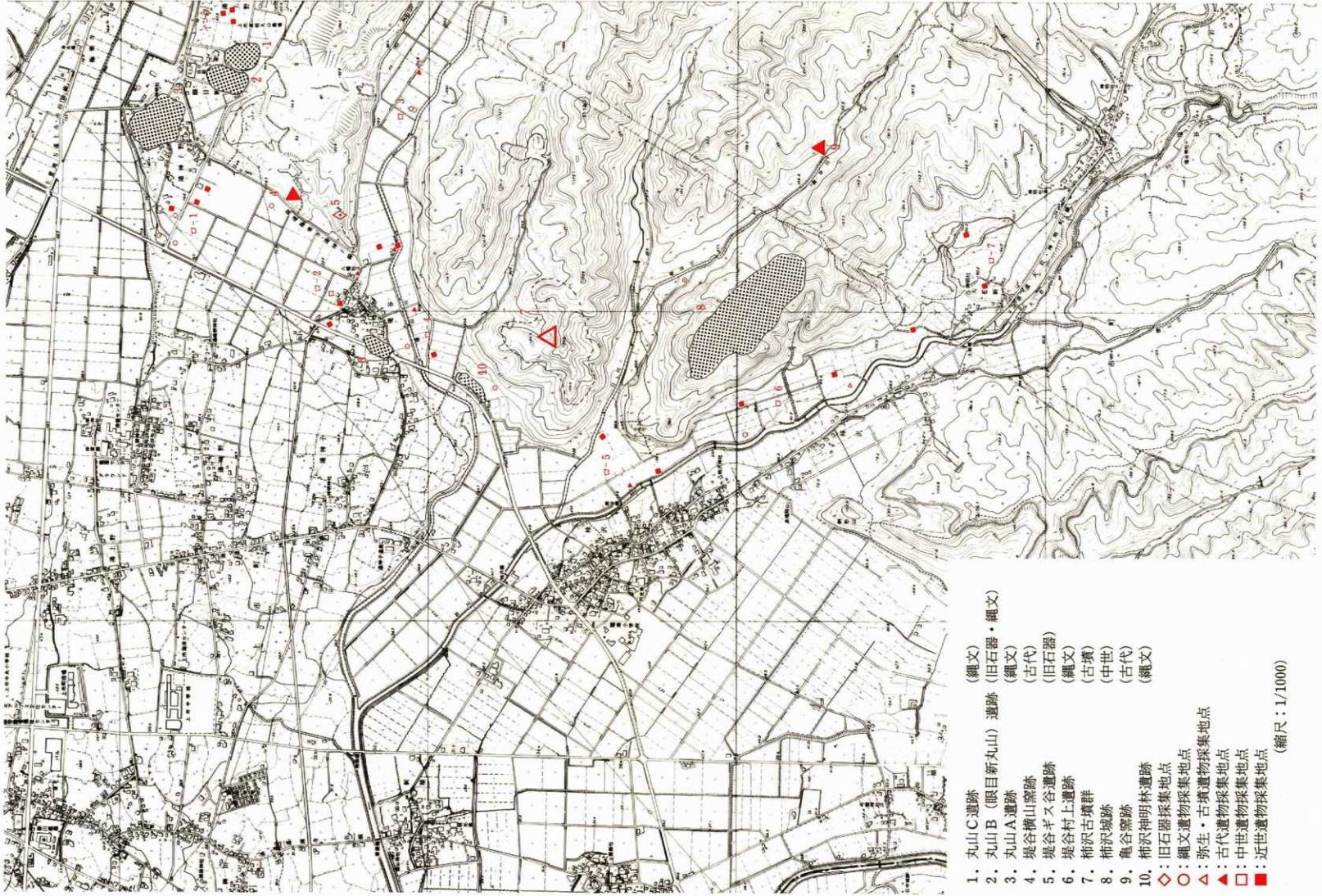
縄文石器（図版5，7，8参照）

写-8



旧石器、縄文土器、土師器（図版9参照）





1990年3月25日 印刷
1990年3月31日 発行

上市町埋蔵文化財分布調査報告II

編集行 上市町教育委員会
印刷 ルチュー一エツ

